



しらかば

2013年夏号 第21号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる

2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412

URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp>

ろうごあんしん

こうせいろうどうしやう
厚生労働省

老後安心して

へいきんねんれい さい かいごしえん じゆうてん
平均年齢75歳、介護支援が重点



こうろうしやう
5月20日、21日、厚労省で
ぜんこく とどうふけん し きこくしやしえん
全国の都道府県や市の帰国者支援
たんとうしや さんか へいせい ねんど
担当者が参加して、平成25年度の
たんとうしや かいぎ ひら
担当者会議が開かれました。

こうろうしやう いっせい へいきんねんれい
厚労省は、一世の平均年齢が75

さい ろうご あんしん ささ じゆうてん かいごしえん
歳、老後の安心を支えることが重点として、介護支援の
りかい
理解をはかることなどを自治体担当者に要請しました。

かいご ろうご しんばいごと そうだん
介護、老後の心配事、ご相談ください。

ろうご かいご
老後、介護のことで「わからない??」「こまった!?!」
ことありませんか。センターでお手伝いします。いつでも
もご相談ください。(向後、矢能、篠原まで)

にほん しあわ せいかつ じりつけんしゅうじぎやう
日本で幸せな生活めざして 自立研修事業

とうきやう おおさか
東京と大阪の
ちゆうこくきこくしやしじりつ
中国帰国者自立
けんしゅう
研修センターが
ほんねん へいしよ
本年3月で閉所
になりました。
えいじゆうきこくしや すく
永住帰国者が少



なくなつたためです。4月からは首都圏センターと
ほつかいどう ていちゃく きこくしや い じりつ
北海道センターで定着した帰国者を受け入れて自立
けんしゅうじぎやう はじ ほんかく どう からふとざんりゆうほうじん
研修事業が始まりました。北海道では樺太残留邦人の
えいじゆうきこく つづ はや じりつ おうえん
永住帰国が続くためです。早くの自立を応援しようと
「進学クラス」「就労クラス」を開講、また就職のため
の「職場体験事業」を行います。



こうりゆうかい
ピクニック交流会 ボランティアさんとい

あさひかわし
旭川市が主催して中国帰国者 樺太帰国者の
みなさんのための日本語教室が続けられてき
ました。そして、昨年からは 旭川市 同市社協
ボランティアセンターとセンターが協力して
『おしゃべり交流会』を開いています。ボラン
ティアさん、旭川市側の担当者のみなさんの
熱意に支えられ、会をかさねて心かよいあう
温かい交流会に発展してきました。

あさひかわし
旭川市の常盤公園で『ピクニック
交流会』を行いました。今年も例年になく遅い
春 桜もつぼみがふくらみはじけたばかり 暖
かな陽射しにめぐまれてお弁当を食べ、公園内
を散策しながら交流を深めました。旭川市に
地域で支える、帰国者の皆さんが安心できる
交流の拠点づくりを、一歩一歩進めていきま
す。(写真「なに?なに?」輪になって交流)

あさひかわし
旭川市・地域で支える場所、作ろう



まな けんこう たのしく学んでいつまでも健康に けんこうこうざ たいきょくけん りょうりこうしゅうかい 健康講座、太極拳、料理講習会

こうれいか いま けんこう たも 高齢化がいわゆる今、健康を保つことがたいせつ。センターの健康講座は介護予防にも やくだち、いつも大人気です。講座に参加してたのしんで健康になりましょう。



けんこううんどうきょうしつ 健康運動教室

わら たの けんこう 笑って楽しんで健康 毎月1回の健康運動教室 は、札幌市中央健康づくり センターの先生の指導でた のしい教室です。ゲームで からだ うご 体を動かしてリズム感ある動 きも「できた!」「できな い?」とそのたびに歓声と笑 い声でいっぱい。元気にとり くんできます。

りょうりきょうしつ 料理教室

ヘルシー!おいしい! 6月10日は、日本の家庭 料理がテーマ。お弁当作りに 挑戦しました。健康志向の メニューは脂肪分も少ない ヘルシー料理、そしておいし い異文化体験にみなさん おおよろこ 大喜びでした。



たいきょくけん 太極拳

けんこう ゆったり健康づくり 太極拳は体にやさしい 健康運動。ゆったりした動き で健康づくりです。「二十四 式簡化太極拳」を学んでい ます。中国帰国者の皆さん はもとより、いまでは樺太 帰国者の皆さんも参加、静か に広がってきました。

ぎょうじあんない 7月から9月の行事案内

- 7月 8日(月) 料理教室(日本のお弁当)
- 7月 11日(木) 旭川市おしゃべり交流会
- 7月 14日(日) DVD上映会(「大地の子」)
- 7月 22日(月) さくらんぼがり
- 8月 26日(月) 料理教室(日本の家庭料理)
- 9月 1日(日) さっぽろ秧歌まつり



にほんごかいわれんしゅう 日本語会話練習 高校生と話しました

「日本語で会話しよう」とボランティアさんの 協力で会話学習と取りくんでいます。今回は、となりの大通高校の生徒さんが参加、若者 との交流は元気がいっぱい。高校生は「たのしい」「はじめて知ったことも」と異文化交流を楽しみながら帰国者理解をふかめました。

もちろん、帰国者のみなさんも熱心なボランティアさんと会話を楽しみ「おもしろかった!」と笑顔を見せていました。

募集! 絵手紙かこう

絵が描けない、描いたことないという人、だれでもすぐにきれいな絵が描けます。(申込みは安池まで)



編集室から: 北海道は白樺の新緑が美しいさわやかな初夏です。みなさんお元気ですか。「しらかば」2013年夏号を発行しました。紙面を新しくしました。これからもセンター一活動を伝えていきます。ご意見、ご感想お聞かせ下さい。

しらかば

2013年秋号 第22号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる

2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412

URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp>

厚別区は札幌市内でも中国帰国者が最も多い、およそ350人が住む地域です。高齢化問題ととりくむ NPO法人シーズネットが、厚別区もみじ台団地ではじめての中国帰国者支援交流事業をくりひろげました。身近な地域で帰国者への理解をはかり、安心を支え孤立しないための拠点づくりへ一歩をふみだしました。



NPO 法人シーズネット 中国帰国者支援交流

おとなりさんを知って もみじ台

本センターの委託で NPO法人シーズネットは、7月28日、9月29日にもみじ台管理センターで帰国者理解と交流のイベントを開催しました。7月は、帰国者二世による餃子作り講習会、帰国者による太極拳表演など、たくさんのお店もあってにぎわいました。団地のみなさんにおとなりに住む帰国者を知ってもらう絶好の機会になりました。

中国帰国者文化作品展やお茶サロン

9月は『ふれあい映画会 & お茶サロン』を開催、200人の帰国者、団地住民のみなさんが参加しました。映画上映会、中国帰国者文化作品展、太極拳、餃子作り体験、中国茶で楽しむサロン+歌声サロンと、もりだくさんなプログラム。参加したみなさんは、映画で泣いて、サロンでおしゃべりして、おいしい餃子を食べ、小学生から大人まで異文化交流を深める一日を楽しみました。

会場には、入口からはじまりいたるところに中国語の案内表示板があり、シーズネットのみ

地域で孤立しないための拠点づくり



【写真上】お母さんと小学生が餃子づくり。【写真下】中国茶を飲みおしゃべり、歌も楽しい交流サロン。

みなさんの細やかな心づかい、やさしさと熱意があふれていました。ひきつづき11月4日、お茶サロンと作品展が行われます。また、シーズネットでは、これからも札幌市内の各地域でも支援事業を行いたいと計画しています。

厚別コミュニティFM・中国語で安心できる

厚別のコミュニティFMラジオ局「FMドラマステイ」では帰国者が中国語の放送を聞くと安心できるだろうと「你好あつべつ！」(4面)を放送中、健康や介護の話もとあげています。その放送を担当する介護予防センターもみじ台の担当者も、会場でイベントの運営に協力、地域に支援の広がりを作りだす会になりました。

しよくばたいけんじっしゅう 職場体験実習 **ゆめ 夢があれば、がんばれ**



がつみつか 9月3日から13日まで10日間の実習を行いました。受入事業所は有限会社齋藤産業です。同社は鉄工業で、齋藤貢生社長は中国帰国者に二世です。齋藤社長も、帰国時には言葉や仕事の問題で苦労した経験があり、Sさんにも「私も同じだった」と「言葉も大丈夫だよ」とやさしく語りかけます。Sさんはロシアでは溶接工、実習では鉄鋼製品の溶接、組み立て作業を行いました。

工場の空気に触れたSさんは、生き返ったようにのびのびと作業を行い、仕事ができる喜びを体いっぱい感じていました。工場の従業員はすべて日本人、職場のみなさんとも打ち解けて作業を進め

じりつ 自立へむけて第一歩

からふときこくしゃ 樺太帰国者Sさんが職場体験実習を行い、就職へ結びつきました。「働きたい」帰国したみなさんはどれもが望んでいる最大の願いです。しかし、求職活動は言葉や習慣のちがいがからむずかしく、何度面接しても断られると、日本社会に受け入れてもらえないのではないかと自信を失いがちです。実習は、日本の職場を体験して自信をつけてもらおうと行ったものです。

ました。実習を終えてSさんは「仕事が楽しかった。早く仕事がしたい」意欲満々。社長も「仕事はできる。言葉は問題ない後からついてくる。あとはやる気」と激励。その後、正式に採用が決まり10月中旬から勤務が始まり、自立へむけて第一歩を踏み出しました。齋藤社長は鉄工業を起業「日本では技術、信用が大事、あとは努力」と、これまでがんばってきました。「夢があればがんばれる」と語ります。Sさんに深い理解をしめし応援してくれています。

日本サハリン協会

きぼう い ちから 希望であり生きる力 サハリン集団 一時帰国団

からふとざんりゅうほうじん いちじしゅうだんきこくだん むか かんげいかい おこな 樺太残留邦人の一時集団帰国団を迎えて歓迎会が行われました。1990年からNPO法人日本サハリン同胞交流協会の手で続けられてきた一時帰国事業は、残留邦人のみなさんには「希望であり生きる力」だといいます。戦後長く樺太(サハリン)に置き去りにされた残留邦人にとって故郷につながるたいせつな架け橋です。

今年、同胞交流協会を引き継いだNPO法人日本サハリン協会(齋藤弘美会長)が、7月と9月に帰国団を受けいれました。7月の帰国団には30名、9月にはロシア大陸からの帰国者も含めて35名が帰国、なつかしい故郷の親族との交流を深めました。札幌での歓迎会が7月8日、9月11日に開かれました。帰国団は高齢の方も多く、永住帰国した帰国者のみなさん、支援者のみなさんに迎えられ、あたたかく包まれて故郷のぬくもりを感じているようでした。





からふと き こくしゃ
樺太帰国者
こうりゅう
交流
パーティ



ロシア式の集い 「ふるさとへ帰ったみたい」



「いっぱい踊っていっぱいしゃべって、楽しいよ！」笑顔いっぱい語る樺太帰国者の皆さん。今年は、帰国者の皆さんによるロシアと同じパーティをという企画で「ふるさとへ帰ったみたい」と言わせるほど、心開かれ思い切り交流パーティを楽しみました。

道内各地／サハリン／東京から集う

いっぱい踊ってしゃべって、楽しい

NPO日本サハリン協会と協力して、12月23日クリスマスに、札幌テレビ塔のホールで開催された今年の交流パーティ。参加したのは、帰国者の皆さん、ボランティア支援者の皆さん、日本サハリン協会の皆さん、子供から小中高生、大学生など120名。持ち寄りのピロシキ、ロシア風サラダの数々がテーブルに並び、手作りの会場の飾りも華やかで、会場は温かく親しみある雰囲気になりました。稚内、旭川、函館から参加した人。遠くサハリン日本人会からの参加、さらに、東京から駆けつけたのは、元日本サハリ

ン同胞交流協会の小川峯一会長、日本サハリン協会の斉藤会長。帰国者の皆さんは大歓迎、協会の皆さん、大家族のように交流を深めました。

トナカイにひかれてサンタクロースが登場して会が始まり、クリスマスツリーが点灯すると一気に打ち解けて、ハーモニカ演奏や歌、そしてバレエ白鳥の湖や輪になってダンスと、皆さん笑顔、笑顔のにぎやかで楽しいパーティになりました。

心温まる交流に「ふだんは話す人もいない、寂しい。だからこの会は続けてほしい」という声が聞かれました。

一世帰国者 温泉一泊研修旅行

こんな時間、必要 「心の奥から話し

皆さんが楽しみにしている年に1回の温泉一泊旅行は、今年は洞爺湖温泉で10月27日、28日に行われました。参加したのは、中国帰国者、樺太帰国者一世の皆さん55名、温泉を楽しみ、お互いの交流を深めました。

中国帰国者一世は残留孤児、苛酷な人生体験を共有するもの同士心通い合わせて深夜遅くまで語り合ったと言います。そして「心の奥の話ができてお互い教えられた」「こんな時間が必要なんだ」としみじみ語り、帰国前のご帰国後のこと人生を振り返り



互いに確かめているようでした。洞爺湖名物の花火大会を楽しみ、世界ジオパーク昭和新山の火山の驚異に驚き、一世の皆さん気持ちも伸びやかに交流旅行を楽しみました。

おしゃべり交流会

おしゃべり 楽しい異文化交流

「おしゃべり楽しいヨ」「樺太ことサ、いっぱい聞か
れたサ」と樺太方言で語る樺太帰国者一世Sさん、Tさ
ん。ボランティアの皆さんとおしゃべり交流会は、会
を重ねて自然なおしゃべりに広がっています。

日本語がなかなか通じない学習者も、耳を傾けてお
しゃべりを聞き、話します。そうすると、お互いになん
とか聞き取ることができて話題が広がっていきます。通

じたというよるこび
嬉しそうな顔。ボラ
ンティアさんも「勉
強になることがあ
る」「考え方の違い
がわかっておもしろ
い」と異文化交流
を楽しんでいます。



旭川おしゃべり交
流会
ハーモニカ演奏・音楽で日本を知る
流会

『継続こそ力』。地域に交流の拠点を作
りだそうと、旭川おしゃべり交流会は会
を重ねてきました。11月21日、おしゃべり交
流を楽しんだ後、ハーモニカ・歩みの会の
皆さんのハーモニカ演奏会が行われまし
た。ボランティアの皆さんには懐かしい日
本の童謡が中心。帰国者の皆さんにははじ
めて聴く曲が多く、歌を通して日本文化を
知る体験になりました。旭川おしゃべり交
流会は、



日本料理教室

おせち料理、おいしい笑顔

12月9日 お正月を前に日本のおせち
料理を作ろうと第3回料理教室が開かれ
ました。中国帰国者、樺太帰国者28名が参加
しておせち料理作りを体験しました。

皆さん、日本料理には興味しんしん、き
れいに盛り付けて試食。賑やかにおしゃべり
しながらひとつひとつの味をためして口に
合うもの合わないもの感想を言い合ってい
ました。

食べる日本文化体験に、勉強になった、楽
しかったと皆さん笑顔でした



NPO シーズネット 中国帰国者支援事業

NPO シーズネットが主催する今年3回目のもみ
じ台団地地域での交流活動。今回は、中国帰国
者文化作品展と帰国者二世Mさん、Sさんが講師
になって餃子作り講習会が行われました。
作品展には、中国画、絵画、書、手芸作品や
中国刺繍が展示されて帰国者文化が紹介され
ました。餃子講習会は団地の皆さんが参加して
中国の餃子作りを体験「手作りの皮のおいしさ
が違う」と、さっそく我が家のメニューにします
と笑顔を見せていました。

おいしいさ違う！

団地のみなさん

餃子づくり

旭川 おしゃべり交流会と料理交流会

2月20日には恒例のおしゃべり交流会が開かれました。この日は、毎回ボランティアで参加する倉重さんのギター演奏会が行われました。溢れる力を感じる演奏に皆さん異文化を超えてともに感動し「音楽の力」を感じました。



3月17日、料理作りで交流と、樺太帰国者 畠山レイ子さん、畠山イリーナさんを講師にロシア料理に挑戦しようという企画。樺太帰国者、中国帰国者、そしてボランティアの皆さん、23名が参加しました。旭川市、旭川市社会福祉協議会、NPO シーズネットの協力を得て神楽公民館で開催された交流会は、参加した皆さんそれぞれに異文化体験を深めました。

料理は「ペリメニ」「ワレニキ」「チェブレキ」「キャベツとニンジン」のサラダ「フルーツサラダ」のロシアの家庭料理です。樺太帰国者の皆さんが大活躍、粉を練ったり具を包



ロシア家庭料理

違いを知っておいしい



んだり、調理法の違いに、驚きの歓声が上がりました。皆さん興味しんしん、中国帰国者はペリメニと中国餃子の作り方の違いにショックと言いつつ「これはワンタンだ」と違いを知って楽しんでいました。

会場は終始活発なおしゃべり、笑顔でいっぱい。「おいしい！」と料理を話題におしゃべりは広がり心と心も近づきました。

食後は、アコーディオン演奏の歌の会、ロシアの歌、日本の歌の明るい歌声が広がり心安まる会になりました。

ボランティアさんは「はじめてのロシア料理」が新鮮体験、帰国者が地域に伝える食文化は生活を豊かに新しい風を吹き込みました。

帰国者が地域に伝える食文化

中国帰国者新年交流会

NPO

地域支援へ広がる一歩



春節を迎えた2月9日、恒例の中国帰国者新年交流会が賑やかに開催されました。身近な地域で帰国者を支えてもらおうと今年は NPO法人シーズネットに委託して開催、東区役所ホールに中国帰国者家族、ボランティア、支援者の皆さん合わせて200名近い人が参加しました。1年に1回の交流会が楽しみな帰国者が多く、家族連れで参加する人、道内町村から参加す

ふるさとの春節みた

2世 歩んだ人生、自信の笑顔

る人もいて賑わいました。今年初めて参加した2世帰国者もいて、帰国以来必死に働き、親を支え子育てをしてきた2世、今は「子供が大学生です」とか小学生だった3世は「就職し社会人です」と、帰国定着からの時間、人生の歩みを見る瞬間でした。言葉や文化の壁を乗り越え苦労を笑い飛ばし、自信に満ちた表情が印象的でした。

恒例の文芸発表では、中国の民族舞踊、楽器演奏、歌が次々に演じられ、会場はふるさとの春節みたいという声も。司会の中国語と日本語の巧みなおしゃべりに打ち解けて、楽しく交流の時間を過ごしました。会はシーズネットの多くのボランティアの皆さんに支えられ新たな広がりを作りだす一歩となりました。

かいご しせつけんがくかい
介護施設見学会

み き た かいご まな
見て聞いて、食べて介護を学

きこくしゃ みな かいごせいど し
帰国者の皆さんに介護制度を知ってもらおうと
かいご ほけんせいど りかい しせつけんがく つづ
「介護保険制度理解のための施設見学」を続けてき
けんがく しょうにんずう ごぜん ごご とおし
ました。見学は、少人数で午前、午後を通してゆっ
くり、じっくり施設を見て、食事を体験して、介護
せいど し けいかく
制度を知ってもらう計画です。



がつとおか からみときこくしゃ めい さんか さつほろしあつ
3月10日、樺太帰国者6名が参加して札幌市厚
べつく かいごろうじん ほけんしせつ
別区の「介護老人保健施設あつべつ」「ケアハウスや
すらぎ」「特別養護老人ホーム厚別栄和荘」の各施設
を見てまわりました。昼はバイキング方式の昼食
をしよくたいけん しゅるい おお かんそう
を試食体験、種類も多く「おいしい」との感想。

ごご しせつ かいご ないよう せつめい
午後からは、施設や介護サービス内容などの説明
を聞きました。参加者からは、生活保護の場合の利用
りようしゃ ふたん ないよう しつもん で ひょう かんしん み
や利用者負担の内容の質問が出て費用への関心を見
せていました。他に、外出はできるか、医療ケア
りようしゃ にゅうしりゆう しせつ つく きじゆん おお
や利用者の入所理由、施設を作る基準など多くの
しつもん で さんかしゃ ようろういん
質問が出ていました。参加者からはロシアの養老院
くら ちが くら しせつ かん
の暗いイメージとは違っているとロシアに比べて施設や環
きよう かいご よ かんしん
境、介護サービスも良いと感心していました。

しよくぼけんがくかい かいご しごと し
職場見学会 介護の仕事を知ろう

しゅうしよく せい びくし げんば し
就職をめざす2世へ福祉の現場を知ってもら
はじ かいご しよくぼけんがくかい ぜんかい つづ がつ
うと始めた介護の職場見学会は、前回に続きは1月
28日に中国帰国者2世、3月13日に樺太帰国者
にち ちゅうごくきこくしゃ せい がつ からみときこくしゃ
2世が参加し行いました。見学施設は、慈啓会特別
せい さんか おこな けんがくしせつ じけいかいとくべつ
養護老人ホーム（札幌市中央区）で、仕事の現場を
ようごろうじん さつほろしちゅうおうく しごと げんば
み かいご しごと りかい ぶか
見て介護の仕事にふれて理解を深めました。

さくねん がつ にち おこ せい きこくしゃ おんせんいっぽくけん
昨年10月27日に行われた1世帰国者の「温泉一泊研
しゅうりよこう さんか <にいえいじ えにわしざいじゆう
修旅行」に参加した國井榮治さん（恵庭市在住）か
ら、そのときの想いを込めた漢詩が届きました。

「洞爺湖に旅し思う」
じぶん じんせい ほこ たか た
自分の人生、誇り高く、立つ

ちゅうごくきこくしゃ せい くにいえいじ
中国帰国者1世 國井榮治さん



遊洞爺湖有感
秋高神爽楽遠足
北海遠瀾聚殘孤
昔日千重異幫怨
今時一碧洞爺湖
亭台傲立身自主
樓閣放目老氣舒
有幸同乾陳年酒
無限夕陽照余途
二一三年一月三日

かいせつ
【解説】

とうや こ たび おも
洞爺湖に旅し思う
あき ひ たび で ころ うご ひろ
すがすがしい秋の日は、旅に出たいと心が動く。広い
ほっかいどう かくち ざんりゆう こじなま あつ
北海道の各地から残留孤児仲間が集まった。
むかし まんしゅういこく ち かぞ くる
昔、満州異国の地で数えきれないほどの苦しみ
かな かせ いまきこく ねん こんべき うみ
悲しみを重ねてきた。今帰国して30年、紺碧の海のよう
とうや こ なが いま いちにんまえ にほんじん
な洞爺湖を眺めて、未だ一人前の日本人といえないが、
にほん ぶんか しゅうかん な おも
日本の文化や習慣に慣れてきたとしみじみと思う。
これまでもこ重く頭を下げて生きてきたが、自分の人
せい うんめい じぶん き こはん あずま
生や運命は自分で決めることができると、いま湖畔の東
や ほごり たか からだ ちから かん た
屋に誇り高く体に力を感じて立つ。
りよかん みずうみ め はな じぶん じんせい ふ かえ
旅館から湖に目を放ち自分の人生を振り返ると、い
なに しんばい きもの はな と はな
まは何も心配はなく気持ちが伸びやかに解き放たれて
いく。

センターや国の熱い支援のもとに、日本人として、
ひび つ かせ じゅくせい こしゅ ろうせい おな な
日々を積み重ね熟成した古酒のような老成した同じ仲
かまよるこ びしゅの ほ
間が喜びをともにし美酒を飲み干す。
あか そら はえ ゆうひ かがや ろうご ひとり にほんじん
赤く空に映る夕陽のように輝く老後、一人の日本人と
あんしん かち じんせい いっぽ ふ だ みち
して安心して価値ある人生へ一歩を踏み出す、その道
かぎ
は限らない。

「いつでもどこでも」学べる日本語遠隔地学習

スクーリング 「はっきり、わかる」

「いつでもどこでも」学べる日本語と中国帰国者定着促進センターの日本語遠隔地学習が行われています。そして、北海道の受講生のスクーリングが北海道センターで行われます。



月1回のスクーリングでは、日頃学んだ学習の点検や指導が行われます。スクーリングは「自分でははっきりしていないところがはっきりする」「一对一の指導で発音などよくわかる」と学ぶ帰国者には好評です。

指導にあたる講師も「学習意欲はとても高い。皆さん課題をしっかり勉強している。」と熱意に驚いています。スクーリングでは、復習を中心に学んだ成果を確かめたり、また学んだことからさらに次の話題に広がり理解を深めることがあるといえます。教室での学習とはまた違った実りある学習ができます。

遠隔地学習の内容も充実してきています。帰国者の皆さん、ぜひ学んでみませんか！

職業訓練見学会 ・ 就職支援の制度を知

3月26日、帰国者の皆さんの就職のために役立ててもらおうと北海道職業訓練支援センター（ポリテクセンター北海道）で、技能を学ぶ職業訓練の見学会を行いました。同センターでは、現在300人が機械、電気、住宅、ビル設備などの科目で訓練を受けています。訓練を受けるため試験、資格の取得や就職などについて説明を受け、各科目の訓練の現場を見学しました。帰国者の皆さんには、就職支援の職業訓練制度に理解を深め、進路を考える参考となりました。

4月・5月・6月の行事

4月22日	第1回健康運動教室
5月11日	第1回DVD上映会
5月15日	旭川市おしゃべり交流会
5月16日	第2回健康運動教室
5月19日	おしゃべり交流会
6月2日	日本の家庭料理教室 1
6月9日	日本の家庭料理教室 2
6月17日	第3回健康運動教室

ニュース

一時帰国団・親族の絆結ぶ

日本サハリン協会の樺太残留邦人一時帰国事業が、15名の一時帰国団を受け入れて、3月23日から29日まで行われました。帰国を前に3月28日、札幌で送別会が開かれました。団員の皆さん「お母さんが日本が祖国と言っていて来てみて日本が好きになった」「自分の家にいるように過ごした」と語り、弟と再会したという帰国者も満面の笑みで迎えていました。

一時帰国事業は、日本とサハリンに住む親族の絆を結ぶ大切な交流になっています。送別会は明るく暖かな雰囲気包まれた親しみある会、皆さん元気な再会を誓っていました。

写真展で樺太帰国者が語る

サハリンの樺太残留邦人をテーマに写真を撮り続けている写真家後藤悠樹さんの写真展が、1月15日から1月20日まで新札幌ギャラリーで開催されました。その会場で1月18日、ギャラリートークが開かれ樺太帰国者川瀬米子さんが残留邦人が生きてきた人生を語りました。参加したおよそ40名の市民が熱心に聞き入り樺太帰国者の実情や問題へ理解を深めました。

編集後記

「初めての味」と新鮮体験に感激したのは、旭川で樺太帰国者との料理交流会に参加したボランティアの皆さん。定着した帰国者が地域に受け容れてもらえないということをよく耳にします。でも、帰国者の皆さんが背負う文化は、人や地域、生活を豊かにするものでもあります。そんな帰国者理解が広がれば帰国者には住みやすい環境が生まれ、旭川の経験で感じたところです。鍵は異文化理解です。

とくていはいどうしや し えんきん じつげん
特定配偶者支援金が実現

ろうく はいぐうしや し えん
労苦ともにした配偶者を支援



きこくしやいっせい せむ
 帰国者1世の皆さんに
 しんぱいごと
 心配事はなにかと聞くと、
 はいぐうしや ろうく こと
 配偶者の老後との答えが
 あら かせ じっさい
 多く返ってきます。実際、
 きこくしや本人が亡くなった
 ときの生活への不安、心配

が強いのです。そうした声を反映して、全国原告団と全
 国弁護団が国へ配偶者支援を要望してきました。その結
 果、支援法の改正があって、本年10月から特定配偶者支
 援金の支給がはじまります。

制度については次のように説明しています。『これ
 まで、配偶者は支援給付を受けています。帰国者本人が
 亡くなったとき、生活保護と同水準の支援給付のみと
 なります。残された配偶者の大半は、残留邦人を長年支
 え続け、日本に骨を埋める覚悟で来日したものの「高齢
 化」「日本語が不自由」「生活習慣に不慣れ」で支援給
 付だけで生活するのは困難という事情を抱えています。
 特定残留邦人等と長年にわたり労苦をともにして
 きた配偶者の置かれている事情を鑑み、特定配偶者支
 援金を支給することになりました。』

きこく りべつ はいぐうしや りかい
「帰国」は「離別」、配偶者へ理解を

とくていはいどうしや し えんきん きこくしやほんじん しぼうご ろうげいきき
 特定配偶者支援金は、帰国者本人の死亡後に老齢基礎
 年金の3分の2の額を支援金として支給するものです。
 年金ではなく、支援給付に加えて国から支給されま
 す。支援金の対象となる人は中国在留時に結婚して、
 帰国後も継続して婚姻状態にある配偶者になります。く
 わしくは、市役所、役場の担当窓口でご相談ください。
 多くの帰国者夫婦は、中国や樺太の地で、また帰国し
 た日本で多くの苦勞を背負い夫や妻を支え生きてきま
 した。帰国者本人は、中国や樺太で家族からの離別を体
 験しました。帰国することで、今度は配偶者がその親族
 と別れふるさとを離れることになりました。配偶者の皆
 さんへのいっそうの理解が求められます。今回の新たな
 制度で、安心が支えられることになるでしょう。



いっせい せむ せむ
 一世クラスは、のんびりだのしい学習、大
 通公園花フェスタで野外授業。[6月24日]

ほっかいどう にほんご
 北海道センターの日本語クラス
 で『中口合同クラス』と呼ぶクラ
 スがあります。そのとおり中国、
 ロシアからの帰国者の皆さんがい
 っしょに学んでいるクラスです。セ
 ンターへ通所する帰国者の3分の
 2が中国帰国者、3分の1が樺太
 帰国者です。中国とロシアからの
 帰国者がいっしょに学んでいるの
 が北海道センターの特徴です。

ちゅう ごうどう たぶんかきょうしつ
中口合同クラスは多文化教室

センター開設以来、中国、ロシア
 からの帰国者は、中口それぞれの
 クラスで学んできました。昨年か
 ら『中口合同クラス』がで1年が
 過ぎました。始まったばかりの時に
 は、受講生も講師も戸惑いがあったといいま
 す。しかし、時間を経るごとに、お互いのコミ
 ュニケーションもひろがり、今では、わきあい
 あい、にこやかに話しています。

クラスで聞いてみると笑顔で「お互い話すと
 きは中国語もロシア語も使えないでしょう。
 日本語で話すしかないでしょう」と「だいい
 うぶ、問題ないよ、心配しないで」と楽しく
 勉強していると語ります。そして「いっしょ
 にカラオケにも行きました」と楽しかったとい
 います。交際も広がっているようです。中口
 の事情は違っても、帰国者同士共感し合える
 ところがあるのでしょう。中口合同クラスは、
 まさに多文化共生の教室です。

日本語
 学習

「日本語で話すしかないでしょう」

■相談事業・道内各地へ巡回相談

とお き こくしゃ あんしん とど
遠くの帰国者にも安心を届けたい

札幌から遠く離れて住む帰国者から電
話があります。病院の検査があるが説明
を聞いても分からない、不安だという訴
えです。相談員は、日程を決めて病院へ
連絡して、町役場の担当者にも連絡しま
す。訪問した相談員が、すぐ傍で医師の
説明を伝えると帰国者の表情にパツと
安堵が広がります。その町には、中国語
が話せる人がいません。本当に困ったと
き頼るところがないと心配を訴えます。

北海道内に居住している中国帰国者、
樺太帰国者は、1世、2世、3世を含めておよそ1400
人余りです。道内179市町村のうち16市6町1村に住ん
でいて、札幌圏以外に3割の帰国者が住んでいます。

センターでは、道内の帰国者の皆さんに等しく支援
の手を届けたいと、相談事業では相談員が訪問して皆
さんの話を聞いて、要望や困っていることがあれば
相談に応じてきました。中国語が話せる相談員、ロシ
ア語が話せる相談員が訪問して話を聞かせてもらい
相談を受けています。

「話を聞いて、知ってほしい」

家庭訪問

訪問すると、皆さん歓迎してくれます。そして、
苦勞を背負ったそれぞれの人生を「話を聞いて
ほしい」「知ってほしい」と予定の時間をこえて話
しこむことが多いのです。地域には中国語やロ
シア語がわかる人はいないので、なによりも思い
を伝えることができることに心が開かれます。
相談員には帰国者問題を知り多くのことを学
ぶ時間にもなります。聞いていて問題を見つける
ことがあります。

そのなかで、国の支援策の情報もとほしく支
援給付制度もよくわからないままに過ごしていたとい
う事情が判明したことがあります。すぐに、市役所や役
場、そして道の担当者と相談し、申請へつなげました。
帰国者1世は、支援給付を受給して安心を得たと喜ん
でいます。こうした訪問を通して、帰国者の皆さんのセ
ンターへの理解も深まり、各講座受講や交流行事への
参加も増えてきました。

巡回訪問をしていると、課題も見えてきます。地域の
身近なところに帰国者を支える人や体制が必要だと感
じるところです。センターは、これからも遠くに住む
帰国者の皆さんのより近くにいて、大きな安心を支えて
いきたいと課題と取り組んでいきます。



旭川 旭川 芸術ボランティア「おもしろい！」



今年度第1回の旭川おしゃべり交流会が、5月15日に行なわれまし
た。帰国者の皆さんとボランティアの皆さん、もうすっかりおなじみと
あっておしゃべりもすぐに盛り上がります。はじめてのボランティアさ
んも自然に仲間の輪にはいり、交流を通じて帰国者理解を深める会に
なりました。今回は、ボランティア芸術グループ「のぞみの会」の皆
さんが、歌や三味線演奏、手品、剣舞などめずらしいたのしい演芸を見せ
てくれました。帰国者の皆さんには、日本の芸術文化にふれて、たのし
み、心やすらぐ時間になりました。

センターのボランティア交流会は、
会話もたのしく続いています。



たのしい、たのしい！の声ばかり

右:ツリー点
灯・輪になっ
て踊る・

下左:みんな
でダンス下
中:子ども達
も夢中・下
右:中高生の
民族舞踊・



日本サハリン協会と協力して開いた交流パーティは、料理も持ち寄りピロシキ、ペリメニなどロシア料理、それに韓国料理というサハリン料理が集まりました。会場も、帰国者と支援者のみなさんが楽しい雰囲気をつくろうと飾りつけました。そうしてセンター藤田所長のあいさつに始まった交流パーティは2世担当者が知恵をしばった巧みな演出。サンタクロースが登場しクリスマスツリーを点灯しようとするすると雪女が妨害するのです。会場は笑いにつつまれ、サハリン協会が用意した大きなツリーに灯が灯ると会場は「わあ」と歓声、一気に盛り上がりました。

あとは賑やかなおしゃべり、そして歌や踊り、ゲームのプログラムが進行して交流深まるパーティです。日頃引き籠もりがちな1世のみなさんは久し

サハリン残留邦人一時帰国団 暖かに歓迎会

NPO日本サハリン協会の一時期帰国事業「サハリン残留邦人集団一時帰国団」の歓迎会が行われました。センターから藤田所長が出席して歓迎のあいさつを述べました。帰国団は、遠藤キゼン団長はじめ32名。9月6日から16日までの日程で函館、札幌、稚内を訪問しました。遠藤団長は「暖かいおもてなしに感動しました。思い出を大切にしたいので再会を願っています」と語りました。

ダンスや歌、民族舞踊、サハリン料理
遠く稚内、旭川からも参加

まるでここはロシア!!



「たのしい」「たのしい」の声ばかり、会場には熱い気持ちが広がりました。昨年(2019年)に続いて12月23日に開催された樺太帰国者交流パーティ、120名もの帰国者のみなさんや支援者のみなさんを集め、まるでここはロシアかと思わせるロシア式のパーティはおおいに盛り上がりました。遠く稚内、旭川から駆けつけた人、札幌の帰国者のみなさんと顔を合わせてお互い元氣かと喜び合いました。

ぶりに会ったとおしゃべりも弾み、社会や大学、学校で活躍する2世、3世のみなさんも舞台上に上がって歌い踊り、小さな孫達にはキャンディのプレゼントもあって、みなさんそれぞれに心開いて楽しみました。

そして、ロシア風にダンスパーティ、曲が始まると誘い合ってダンスの輪が広がりました。閉会はサハリン協会斉藤弘美会長が「楽しかったですか!!来年もまたあいましょう」と元氣なあいさつをしました。

樺太帰国者パーティは、まるで大きな家族の集まりです。みんなが親しくて、うちでいてわだかまりなく、友情を確かめあいました。参加した帰国者は「いつも生活で大きなストレスを感じる。ロシアにいるときと同じパーティは心落ち着き元氣になる」と笑顔で語っていました。

シベリア一時帰国団 日本へ来てうれしい

日本サハリン協会では、10月15日から25日までの10日間シベリア一時帰国団を迎えました。岩本照雄さん(ケメロヴォ)を団長に一行は12名。東京、箱根、札幌を訪問しました。24日には札幌で送別会が開かれ、岩本団長は「日本へ来てうれしかった。あつという間に過ぎた」とシベリアの残留邦人にとって祖国とつなぐ一時帰国事業は素晴らしい事業であると感謝の気持ちを語りました。

ひとりじゃない、仲間がいるんだ！ 心満たす交流

登別温泉 宿泊研修旅行 120パーセントの成功だ！

語り明かし友達できた！ 来年も会おう

帰国者のみなさんが心待ちにしていた宿泊研修旅行は、「120パーセントの成功だ」と言わせるほど喜びあふれる旅行になりました。10月19日、20日の二泊二日、道内各地から合わせて47名の中国帰国者、樺太帰国者1世のみなさんが、登別温泉に集いました。

日頃の生活の中で孤立感を覚えることの多い帰国者のみなさん。言い尽くしがたい苦難を経験し同じ人生体験、境遇をともにする仲間同士が集まり一夜を語り明かしました。そのことが心と心をつなげてあたたかな連帯感と呼び起こし、帰国者のみなさんの心を癒やし満たすようです。

今年の交流会、ともに食事をしたあとはゲームやカラオケを心ゆくまで楽しみおしゃべりも盛り上がりました。はじめて参加した1世は「いい人と友達になれてよかった」とうれしそうに語ります。皆、肩を組み和気



あいあい「来年もまた会おう」「仲良くなった」と大喜び、もう一人ではないとみなさんは仲間の絆を確かめあっていました。

登別は、国内最高の温泉地のひとつ、ゆっくり温泉につかり心身ともに癒やされました。二日目は、マリナーパークニクス水族館の見学でみなさん新発見に気持ちもワクワク、体験や見聞を広げて心満たされる研修旅行になりました。

7月7日 いちご狩り

のびのび、気持ちも解放されて



毎年恒例の人気のかだもの狩り、今年はいちご狩りです。札幌のとなり北広島市の「ベリーランド佐藤農園」で100名が参加し、いちご狩りを楽しみました。いちごを摘みながらみなさん「あまい」「あまい」とわいわい

がやがやと広いいちご畑におしゃべりも広がり、収穫体験を楽しみました。働く2世は、野外活動にのびのびと気持ちも解放されていっぱい笑顔。「こんな活動が必要、ありがとう」と職場の苦労を忘れて交流を楽しんでいました。

いちご狩りを楽しんだ一行は野幌森林公園で「昼食大交流会」、持参したお弁当をテーブルに広げて、豊かな緑、吹きわたる心地よい風のおかげでそれぞれ思い思いに交流を深めました。ひとりじゃない仲間がいるんだとあらためて知ることでできた一日になりました。



社会見学会札幌市下水道科学館

下水処理、水の大切さ学ぶ

8月19日、20日、21日、身近な生活知識を広げようと1世が学ぶ日本語クラスを対象に、社会見学会を行いました。今回のテーマは「下水道」、家庭で使った水はどこへ行くのだろうか、という疑問に答える見学会です。

札幌市下水道科学館と隣接する下水処理場を見学しました。身近な生活を支える下水の大切な役割を知った皆さんは、処理された水は魚が住めるくらいきれいになると知って「素晴らしい、考えられない、勉強になった」とおどろき、またひとつ日本社会への理解を広げました。

安心して暮らすために 孤立しない拠点づくり

ボランティアさんが伝える日本料理

旭川・日本料理交流会

熱意、暖かさにあふれて



11月20日、旭川でこれまで交流を積み重ねてきたボランティアさんが中心になって、日本料理交流会が行われました。昼食交流会では、中国、ロシアそれぞれの料理の違いを語り合いながら交流を深めました。

ボランティアさんが、買い出しから調理指導まで担当、たくさんの食材を提供もあり、ボランティアさんの熱意と温かい気持ち会場に立ち渡っていました。帰国者のみなさんもさまざまな調理を体験し日本料理を楽しみました。

メニューは、日本の家庭料理、煮しめ、ほうれん草のごま和え、だし巻き卵、おにぎりなどなど、ほかにはおぎや自家製漬物を持ち寄り、テーブルにあふれるばかりの料理が並びました。

中国帰国者のSさんは、初めての和食を完食してみせ「おいしい」と笑顔。樺太帰国者のKさんは少し苦手な味もあるけど調理は楽しかったと語っていました。ボランティアさんからは「楽しかった。もう一度やりたい」と積極的な声も聞かれて、参加したみなさんが大いに食文化、異文化体験を楽しんだ一日になりました。

旭川・社会見学交流 一日中、交流、交流！

7月28日、旭川で 風に吹かれて、花いっぱい、爽やか、
のおしゃべり交流会 心開いて・・・気持ちよく
は、社会見学交流を行いました。

帰国者、ボランティアさんが、北海道新聞社旭川工場の見学、昼食もいっしょ、上野ファーム参観と一日中いっしょという密度の濃い交流の時間を過ごしました。旭川の夏らしい爽やかな日、花のガーデンで有名な上野ファームでは咲き乱れる花々に囲まれ、爽やかな風に吹かれて心も開かれ、屋外の交流は「いつもは遠慮があったけど今日はいろいろ話せた」「気持ちよく楽しかった」と帰国者の感想。木陰の下でお互いの交流もいちだんと深まりました。



どうです。
みなさん、
気持ちがよ
さそうでし
ょう！



上：和食の切り方学ぶ
右：料理を前に記念撮影



稚内・帰国者座談会

進めよう 安心して暮らすために

稚内には樺太帰国者と中国帰国者が住んでいます。札幌から遠いこともあって、センターの支援が届かない地域でした。稚内の帰国者のみなさんが安心して暮らせるために何ができるか、まずは帰国者のみなさんを知り要望を聞かせてもらおうと、11月18日、稚内帰国者座談会を、NPO日本サハリン協会との協働事業として取り組みました。

参加したのは、樺太帰国者のみなさんや支援者、そしてサハリン協会斉藤会長、道社協宗谷地区事務佐藤所長です。座談会は、打ち解けた雰囲気でも活発な話し合いになりました。「介護について知りたい」「地域のことを知りたい」「日本料理習いたい」など要望もあり、早速、「介護学習」や「地域を知る学習会」など実現に向けて取り組むことになりそうです。

稚内での支援事業は、一歩を踏み出したところ。支援の地域格差を埋めて、みなさんが安心して暮らす事業を日本サハリン協会と協働で進めていきます。

太極拳教室・気軽に根気よく継続して

心身の健康のために

静かな教室です。ゆったりした開放的な雰囲気、ゆっくり時間が流れています。先生のやさしい声が聞こえてきます。太極拳教室は、センター開設以来7年間続いてきました。指導してきたのは、藤原真知子先生です。北海道太極拳協会所属で3段の専門指導員です。



やさしい指導は大好評

「おもしろい」「楽しい」健康づくり

藤原先生の太極拳に風格を感じるという1世、やさしい指導は好評です。いまは23人が参加し熱心に学んでいます。ほとんどが1世です。太極拳は、介護予防にも効果的、体力に合わせて体にやさしい心身の健康を保つ保健運動です。高齢化が進み健康がいちばんの心配事という1世に聞いてみると、なかなか覚えられない、けれど体が心地よいと「おもしろい」「楽しい」と言います。ロシアから帰国したYさん夫婦そろって「健康のために」と太極拳が大好きになった様子、中国文化を楽しんでいます。

なかなか覚えられないというみなさんに、藤原先生は「みなさん同じです」と継続こそ力、くりかえしくりかえし指導していきます。休み時間には、先生との談笑も弾みます。太極拳は気軽に根気よく継続することが大事、教室は帰国者のみなさんの笑顔、そして健康的でやさしくてあたたかな空気に満ちています。

歌う喜び、歌うと勇気が出る

みんなで歌おう教室



「歌を歌っているとき、辛いこと悲しいことみんな忘れて心から楽しい」と話す「歌のクラス」の受講生。「みんなで歌おう」クラスは、センターが開設されたときから始まりました。各々の専門的な指導者である瀬川悟郎先生と菊岡俊子先生の指導が続いてきました。今ではクラスは合唱団、きれいな声が伸びやかに響き、力強い歌声が広がります。歌は、中国やロシア、日本の歌を幅広く歌います。歌を通じて異文化理解も深まります。先生の指導は「素晴らしい」と、帰国者の皆さんにも大好評、歌う喜びを与えてくれたと言います。教室は、最初は声を出すために体をリラックスさせてと体操から始まります。そして、発声練習。菊岡先生に合わせて「ま～あ～」「め～え～」とよく声が出てきます。歌は国や文化、言葉の壁を超えて人の心に響きわたるものです。1世の皆さん「楽しい!」「気持ちのびのびする」と歌うと勇気が出ると言います。日頃異文化の壁に囲まれて生きる帰国者の皆さんが、声にして想いを歌うことで、閉ざされた心を開き気持ちを奮い立たせ生きる自信が湧いてきます。まさに「音楽の力」を発揮する教室です。

音楽の力、発揮する教室

■訃報■ 瀬川悟郎先生が急逝

10月1日、センター開設以来7年にわたり「みんなで歌おう」教室をご指導いただいた瀬川悟郎先生が、急病のため逝去されました。満82歳でした。先生は帰国者のみなさんとの関わりに喜びを感じると語っていました。長年のご指導に心から感謝申し上げます。ご冥福をお祈りします。

ボランティア研修会 『帰国者の話す日本語について考える』

わかりやすく話す技術、身につけよう



9月28日、帰国者のみなさんが、日本語を使うときどう感じているか、日本語を母語としない人の話す日本語をどう考え受けとめ何をすべきか『帰国者の話す日本語について考える』をテーマにボランティア研修会を開催しました。講師は、北海道大学留学生センター准教授小河原義朗先生です。

日本語できないことわかってほしい

最初に就労経験のある中国・樺太帰国者2世が日本語を使うときどのように感じているかを知ろうとインタビューしました。「職場であなたの日本語がわからない、もっと日本語勉強しろと言われる」「役所の人言葉が難しい、やさしい言葉で話してほしい」「通じないときは他の言い方をする」「日本語ができないことを周りの人にわかってほしい」などを帰国者のみなさんが訴えました。

帰国者の状況を知って私たち母語話者は何をすべきかと、小河原先生はインタビューをもとに参加者同士に話し合ってもらい、日本語を母語としない人の発音を聞いてどう感じるか、録音を聞いて評価してもらうなど体験的な講義を進めました。

例外はあるとしても日本語を母語としない人は母語話者と同じように話すようにはなれない。さらに、現在5,60人に一人が外国人と日本社会の多国籍化多言語化が進んで社会が変化してきている。母語話者でない人の日本語をどう理解するかが普通のことになってきているという状況を説明し、スムーズなコミュニケーションのためには母語話者の方から理解し工夫することが求められると話しました。

わかり合えるところに近づこう

そして、母語話者でない人の「背景を知ること」、「わかりやすい日本語を話す技術を身につけ聞こうとする姿勢」、「少しでも外国語を学習し多言語社会の環境を作る」、コミュニケーションのうえで「見えないルール、価値観、規範などを知る」ことを身につけ周りにも広げてほしいと語りました。

帰国者が「簡単な言葉で話す」などやっていることを、母語話者の方もやればわかり合えるところに近づけると締め括りました。

かんたん！らくらく介護教室

「介護」を知って不安なく

帰国者の皆さんに「介護問題」を理解してもらい、介護や老後への不安を取りのぞこうと介護講座と取り組んでいます。

学習は、札幌市社会福祉協議会の「かんたん！らくらく介護教室」に参加して学び、帰国者のみなさんには好評です。

7月24日には暑い夏に注意しようと「脱水を学ぶ」をテーマに学習し高齢になるといっそう水分を取ることが大事と学びました。

認知症を学ぶ 知っていたら違う



11月13日は、初級医療クラスの受講生5名、11月20日は中級医療クラスの受講生5名が参加しました。今回のテーマは「認知症の人の介護と

足浴について」そして「家庭でできる足浴と衣服の着脱」です。

認知症の介護を学んだ人は「今思うと母が認知症だったと思う。知っていたら違ったのに」とか「家族に認知症の人がいたら知っているのと知らないのでは接し方が違う」と理解を深めました。

体験的に学ぶ教室では、足浴体験。「足がこんなにも軽くなるんだ」とこんなにすばらしいものがあつたんだと家庭でも続けたいという人も。

この介護教室は、帰国者のみなさんには大好評「ぜひ、これからも教えてほしい」「機会を設けてほしい」という声が届きました。



食文化体験する日本の家庭料理教室

おせちを作る 雑煮とてもおいしい

12月1日、お正月が近づくと毎年料理教室は「おせち料理」を学びます。雑煮、栗きんとん、筑前煮など。お正月料理には使う材料、切り方にも意味があり、願いを込めて作ると説明を聞いて、みなさん日本の食文化への理解を深めました。さっそく試食、雑煮は「薄味だけどとてもおいしい」、栗きんとんは、砂糖が多すぎる、少なくともおいしいと議論、みなさん味覚の異文化体験を楽しみました。



秋の味覚 秋刀魚料理に挑戦

9月1日、日本の秋の代表的な味覚さんま料理を学びました。「さんまの蒲焼」「じゃがバター煮」「きのこ汁」など秋の料理作りをたのしみました。さんまの三枚おろしを体験し「なるほど」と日本式調理法に感心、できあがった料理を食べて秋の和食の味覚体験しました。

旭川・次のステップへボランティア会議開催

旭川のボランティアさんの理解と力を得て交流は広がり深まっています。次のステップへ進もうと、9月25日、ボランティア会議を行いました。日本料理交流会(5ページ)を計画、これからは帰国者が孤立しないための交流活動やネットワークづくりを進めていきます。

1月・2月・3月の行事

1月10日	健康運動教室
1月21日	旭川・おしゃべり交流会
2月1日	第6回 DVD 上映会
2月10日	ボランティアさんとの料理交流会
2月22日	中国帰国者新年(春節)交流会
2月27日	ボランティアさんとの料理交流会
3月19日	旭川・おしゃべり交流会
3月22日	稚内・介護を学ぶ会

NPOシーズネットの地域支援事業

帰国者、団地で餃子づくり交流

センターの委託事業としてNPOシーズネットが進める地域での支援事業が取り進められました。9月29日、「中国・樺太帰国者との交流会」が札幌市東区民センターで開催されました。帰国者理解のための講演会と中国・樺太帰国者の文化作品展が行われました。

10月13日、昨年に続き札幌市厚別区のもみじ台団地で「中国・樺太帰国者おもてなし文化交流会」が開かれ餃子づくりと文化作品展が行われました。餃子づくりは、団地の住民と帰国者が参加。帰国者のみなさんが住民のみなさんに餃子づくりを伝えました。

中国残留邦人等支援に係わる研修会

医療・介護が心配 安心してもらえる支援を

11月4日、道と共催で道内の帰国者が居住する自治体の担当職員や支援相談員の研修会を開催しました。研修会には8市1村からの参加がありました。厚労省 中国残留邦人等支援室から高橋地域支援係長が出席しました。高橋係長は、国の支援策について1世は介護問題、2、3世は就労支援が課題であると報告し、新たに始まった配偶者支援金について説明がありました。

自治体の担当職員や支援相談員からは、それぞれの地域の実情や課題など報告があり熱心な意見交換が行われました。自治体担当者からは高齢化にともない医療、介護が心配という報告が多く、帰国者のみなさんに安心してもらえる支援を考える研修会となりました。

●編集後記

戦後70年という年を迎えました。中国、樺太帰国者の傍でその人生を見ると、まさに歴史の証人としての足跡を見る想いがあります。二つの国に生きて、なお喪失感を抱える人々、あの戦争がなければ違ったのにと口々に言います。その深い空寂を埋めることを思います。それから70年の間に生まれた二、三世です。彼らが承継するもの、それを背負いながら歩む「第3の道」が歴史を切り拓くのかと思います。

ねんちゆうごく き こくしゃしんねんこうりゆうかい き こくしゃ か ぞく たす あ
 2015年中国帰国者新年交流会 帰国者家族、助け合おう

くろう なかま しゅんせついわ
苦勞ともにした仲間たち、春節祝う

しゅんせつ むか がつ にち ちゆうごくきこくしゃしんねんこうりゆうかい じち
 春節を迎えた2月22日、中国帰国者新年交流会が自治
 ろうかいかん ひら あつ きこくしゃ
 労会館ホールで開かれました。集まってきた帰国者のみな
 さん「新年好!」「過年好!」と「ひさしぶり、元気?」
 と声をかけあい、なごやかに交流を深めました。

あつ
 集まったのは160名の一、二世、三世帰国者のみなさん、そして四世も。会場は二、三世帰国者のみなさんが中国の春節らしい雰囲気をと、舞台には龍、会場には中国の赤い提灯、入口には春聯で華やかに飾り付けました。

しかい こうこうせい だいがくせい さんせい わかわか にほんご ちゆうごく
 司会は、高校生と大学生の三世、若々しく日本語、中国語で進行します。藤田所長の「親睦を深め、春節を祝いましょう」との開会あいさつに続いて、一世山田光平さんが「私たちは人生の半分以上を中国で過ごし困難を乗り越えて帰国しました。帰国者家族は助け合い過ぎていきましよう。幸福と健康を祈ります」と呼びかけて乾杯、にぎやかに交流会が始まりました。恒例の演芸発表では、「苦勞をともにしてきた仲間達よ、ふるさとを思い起こし歌いましょう」と中国民族舞踊や民族音楽、歌がいきいきと力いっぱい演じられました。会場は春節の喜びに満ちて笑顔がいっぱい。働く二世帰国者のみなさん、仕事に大活躍の二世たちが「日本へ来てからの年数が中国にいるときよりも長くなった」と苦勞を振り返り語り合い、明日への力を得ていたようでした。



交流深めて、明日への力



にぎやかに交流、歌のクラス、民族舞踊、太極拳、変臉、日本舞踊などたのしみました。



あさひかわ こうりゆう つぎ
 旭川・おしゃべり交流 次のステップへ

ち いき ちい き あら けいけん
ボランティアさんと地域とつながる新たな経験

ちい き きこくしゃ あんしん く つづ
 地域で帰国者のみなさんが安心して暮らせるようにと続けてきたボランティア支援者のみなさんとの交流会は、帰国者のみなさんとボランティアさんをより近づけてきました。この冬、2月の旭川冬まつりでは、ボランティアさんの紹介で、帰国者が通訳やカメラのシャッター押しボランティアで参加しました。帰国者のみなさんが、社会活動に参加してさまざまな体験をして生活活動を広げることは、地域につながるうえで大切です。ボランティアさんの支援で新たな経験が始まっています。

がつ にち こうりゆうかい つぎ そうだん
 3月19日のおしゃべり交流会は、ボランティアさんといっしょに次のステップへと相談。老後問題への理解を深めるため、5月には介護施設の見学会を行うことになりました。

え て がみきょうしつ
絵手紙教室

ちから
がんばる力になる

さくひん
「作品ができたとき、
よるこびいっぱい！」



えが つら
「描いていると辛いこと
くる わず
苦しいことみんな忘れる」



かいせつ いらい ねん え て がみ
センター開設以来8年になる絵手紙
きょうしつ きこくしゃ じぶん
教室では、帰国者のみなさんが自分の
おも えが あらわ ところ たの
思いを描き表すことを、心から楽しんで
まいかい きせつ だいたい
います。毎回、季節のものが題材になり
ひ はる はな だいたい
ます。この日は春の花が題材。筆をと
きんちょうかん いろ しゅうちゅう
るときの緊張感、色づかい、集中し
せん いろ かさ
て線をひいて色を重ねていきます。そし

ひとことそ え ねん しどう やまだ
て一言添え書きをします。この8年指導にあたってきた山田
けい こせんせい ひ とりひとり よ そ こえ と き て と
恵子先生が一人一人に寄り添い声をかけ、時には手を取り
ねっしん しどう つづ さいご やまだせんせい こうひょう わら
熱心な指導が続きます。最後には、山田先生の講評があり笑
ひろ たの しんこう
いも広がりなごやかに楽しく進行します。

き さくひん さくひん よるこ なん
聞いてみるとみなさん「作品ができたときの喜びが何と
じゅうじつかん かん ようす いろ たの
もいえない」と充実感を感じている様子。「色づかいが楽し
えが つら くる わず
い」「描いているとき辛いこと苦しいことみんな忘れている」
かた はたら にせい じゅうごうせい じ かん
と語ります。働く二世の受講生は「こういう時間がたいせ
きょうしつ つづ ちから い
つ。教室を続けてほしい」とがんばる力になると言います。

かんせい さくひん どうない ひとりく きこくしゃ じ むきょく おく
完成したみなさんの作品は、道内の一人暮らしの帰国者のみなさんへセンター事務局から送って
います。そうすると電話や手紙が届いて声を聞くことができます。絵手紙がセンターと通所できな
い帰国者のみなさんをつなぐ仲立ちにもなっています。教室は、ボランティア支援者のみなさん
さん か こうりゅう ぶか きょうしつ しず ぶん い き えが お つつ
も参加、交流も深まります。教室は、いつも静かな雰囲気やさしい笑顔に包まれています。

にほんご かいわ しょくぶん か こうりゅうかい
日本語会話と食文化交流会

たのしい みんなイキイキ交流

ちゅうごく かていりょうり いぶん かこうりゅう
中国、ロシア家庭料理、おいしく異文化交流



にがつとおか ひがしくみん にほんごかいわ しょくぶん かこうりゅうかい
2月10日、東区民センターで「日本語会話と食文化交流会」を
おこな きこくしゃ かていりょうり しょうかい
行いました。帰国者のみなさんが家庭料理を紹介しながらボラン
ティアさんと会話しようという計画。中国クラス、ロシアクラス
のみなさんがそれぞれがグループになり、自由にメニューも考え
てもらうという企画です。ボランティアさん、帰国者、講師のみなさん、30名余りが参加しました。

か もの はじ かいわ こうりゅう しぜん にほんご ちょうり
買い物から始まった会話交流は、自然に日本語が出てきます。調理が始まると、グループごとに「つぎ
はどうするの」と会話は弾みます。「イヤァ楽しい。教室と違ってみなさんイキイキしている」とボランテ
ィアさんもイキイキ。中国帰国者班は、餃子はもちろんそれぞれのお得意料理、餅、スープ、炒めものなど
もりだくさん。からぶと きこくしゃはん じゅう かんが
太帰国者班は、クレープ、サラダ、マッシュポテトや肉料理、わいわいがやがや生きたおし
ゃべりが広がり、みんなが協力しておいしい料理をつくりあげました。

ちゅうごく きこくしゃ ぶん い き たの えが お りょうり きょうみぶか たい から
中国帰国者は「とっても雰囲気がい。楽しい」と笑顔。ロシア料理ははじめてと興味深そう。対して樺
太帰国者も「中国料理ははじめて、おいしい」と嬉しそう。ボランティアさんも2カ国の料理に大満足、異
ぶん かたいけん たの かいわ こうりゅう ひろ いちにち
文化体験を楽しみ会話交流を広げた一日になりました。

にほん かていりょうり こうしゅうかい
日本の家庭料理講習会

メニューはおでん、「だし」の食文化を学ぶ

6月1日、日本の家庭料理講習会を行いました。今回の家庭料理は「おでん」。和食の基本はだし、だしの食文化を学ぼうと「おでん」に挑戦しまし



た。大根とたまごとちくわのシンプルなおでん、そして「肉巻きおにぎり」と「パプリカのごま和え」のメニューです。北ガスクッキングスクールで行われた講習会では、帰国者のみなさんにとっては異文化の味に興味しんしん。みなさん、にぎやかに楽しみながら調理に挑みました。そして、試食です。「おいしい」という人、異文化の味をたしかめる人、それぞれ食の異文化体験を楽しみました。

きこくしゃさんせい しんがく
帰国者三世の進学ニュース

おお ゆめ じつげん いっほ
大きな夢の実現へ一歩

だいがくじゅけん ことし あか とど
大学受験で、今年も明るいニュースが届きました。この春、樺太帰国者三世の二人、中国帰国者三世の二人が難関といわれる国公立大学への入学を果たしました。

センターで進学相談にあっていたAさんは秋田市の国際教養大学、Bさんは小樽商科大学へ入学しました。ほかに中国帰国者三世Cさんは東北大学、Dさんは北海道教育大学へ入学しました。それぞれ将来に大きな希望をもっています。夢の実現に一歩を歩みだしました。

子供達の進学は、家族にとっても大きな自信、励みになるものです。センターには届いていませんが、今年も他にも多くの帰国者の子供達が進学を果たしたと思います。二つの文化、言語を持つ帰国者の子供たちは、新たな未来を切り拓く担い手になることでしょう。

こうせいらうどうしやう ぜんこくたんとうしやかいぎ れんらくかいぎ
厚生労働省 全国担当者会議・センター連絡会議

きこくしゃ こども つた
帰国者のこと、子供たちに伝えよう

まいとしこうせいらうどうしやう ひら ぜんこく しちょうそん き
毎年厚生労働省が開いている全国の市町村の帰国者支援の担当者を集めた会議が、5月19日に東京の厚生労働省で開かれました。本年度は、二・三世の就労支援を重点に取り組みすることとして、各自治体への協力要請がありました。これに関連して、本センターが、就労支援の取り組みについて発表しました。

つづ よくはつか ぜんこく れんらくかいぎ ひら
続く翌20日には、全国のセンター連絡会議が開

れました。厚生労働省中国残留邦人等支援室から、本年の重点として、二・三世への就労支援事業とともに、今年は新たに文部科学省が行う小学校の土曜学習応援団に協力して帰国者問題の子供の世代へ伝えるための継承事業への取り組みが示されました。そして、これまでの地域で帰国者の安心を支える地域生活支援推進事業も、ひきつづき取り組むことになりました。

7月・8月・9月の行事

7月12日	帰国者介護予防サロン(委託)
7月13日	サクランボ狩り交流会
7月16日	旭川・おしゃべり交流会
7月30日	稚内・利尻島めぐり見学会
8月2日	帰国者介護予防サロン(委託)
8月30日	DVD 上映会
9月14日	日本の家庭料理教室
9月	旭川・稲刈り体験交流会

●●編集後記

せんご しんぶん きこくしゃほうどう め
戦後70年、新聞、テレビで帰国者報道が目につくようになってきました。筆舌に尽くしがたい体験を抱える帰国者のみなさん、家族を失った悲しみ、棄てられたという強い思いがあります。今号で取り上げた日本語学習、聞いてみると、学ぶ熱意の中に失われた時間、人生を取り戻そうとしていることがわかります。その人たちが、70歳を超えて「二度と繰り返してはならぬ」と一様に語ります。伝えたい「人生」です。(K)

2015年中国・樺太帰国者文化祭

し
知ってください
きこくしや
帰国者のこと

「母さん、おれだよおれ！」と、舞台上で日本語劇が繰り広げられました。会場からは拍手や笑い。「オレオレ詐欺って何？」と社会問題をとりあげた学習発表会の一コマです。童話や民話を題材にした劇や朗読、スピーチなどなど、それぞれのクラスが創意あふれる日本語発表を行った学習発表会。また、いきいきとのびやかに演じられた中国、ロシアの歌や踊りの文芸発表会、さらに文化香りたつ帰国者の趣味や創作活動を紹介した作品発表展、昨年に引き続き『中国・樺太帰国者文化祭』が、11月29日、かでるホールで開かれました。



会場のみんなんも参加して映歌おどり(上)

日本語劇や中口の歌や踊り、作品展も

第1部は「学習発表会」。帰国者のみなさんが深い思いを抱いて学び続ける日本語、その伝え合う喜びを表す舞台上「緊張したけどおもしろかった」と帰国者のみなさん、充実感いっぱいに語りました。第2部は「文芸発表会」。中国帰国者が演じる華やかな民族舞踊や太極拳、外国に繋がる子ども達への学習支援を行っているCaSA-NPOで学ぶ子ども達のかわいいロシアの踊りに会場も笑顔に、子ども達の母文化活動の大切さを見せてくれました。

太極拳クラスの表演、歌のクラスの発表も日頃の練習の成果を見せてくれました。さらに、展示ホールでは作品発表展が開かれました。油絵、書道、中国画、手芸など多彩な作品がいっぱい、出展した帰国者のひとは「こんな場所で見られるのはうれしい。来年も出します」と認められる喜びを語っていました。

文化祭は、多くの市民のみなさんに、聞くことと見ることを通して帰国者の生活や文化を身近に感じて知ってもらうことも大きな目的。会場には多くの支援者や市民のみなさんが来場、帰国者の日本語を聞いて文化活動を見て帰国者のみなさんへの理解を深めました。

高齢化の進む帰国者一世のみなさん、センターでの学習、交流活動に参加して豊かな精神生活をめざす、その成果を披露した文化祭になりました。

日本語劇「オレオレ詐欺」と踊らえた名場面(右)
緊張するけど充実、日本語発表(下)



多文化の共演、CaSAの子どものダンス(左上) 文化香る作品展(上右) 太極拳クラスの表演(下左) 中口の共演、二人は所沢センター同級生(下右)



旭川 おしゃべり交流「稲刈り体験」

体験して郷土を学ぶ人生ではじめて稲刈り

9月17日、この日は天高く広がる青空と黄金色の田んぼ、旭川地方は「上川百万石」と呼ばれる北海道でも有数の米どころ。今回は「稲刈り」に挑戦しました。旭川の中国、樺太帰国者とボランティアのみなさんが参加、東鷹栖の農家黒川博義さんの田んぼで稲刈りを体験しました。計画して準備したのはボランティアさん、郷土を知ってもらおうと現地を何度も訪ねて準備しユニークな「郷土学習会」を成功に導きました。



ボランティアさんの力で実現

黒川さんは四国から入植四代目の農家、東鷹栖の開拓の歴史を話してもらいました。日本で新たな人生を築く帰国者のみなさんには、住んでいる地域を知ることは欠かすことのできない大切なこと。黒川さんは、開墾の歴史とともに黒川さん宅のうしろに広がる突哨山のかたくりの花の群生地の保護に、市民とともに力を尽くした方で自然保護の大切さも語られ、この地に人生を育んだその人柄にみなさん魅了され、おおいに感じるところがありました。

『稲刈り体験』は、近くの農家の主婦が先生。鎌の使い方、稲刈りの指導を受けながら体験しました。みなさん、黄金色の稲に囲まれて稲や土の香りも新鮮、青空の下、気持ちがいいと稲刈り体験を楽しみました。お米がどうやって作られるのか、帰国者のみなさんもボランティアさんも体を動かして知ることができました。さらに、黒川さんの案内で東鷹栖の農家のみなさんの協力のもとコンバイン機械による稲刈りや乾燥工場の見学で、効率化された現代の稲刈りをはじめ知って驚き、感心していました。帰国者のみなさんも「稲刈りは人生で初めての体験」「体験して知る見学は大好き」とあらためて郷土の農業や農家の生活を身近に感じとっていました。

稲刈りのあとは、同じ東鷹栖のボランティアさん宅でバーベキュー交流が行われました。ご厚意で用意された新鮮な野菜もいっぱい、交流を重ねてきたボランティアさんとは、もうすっかり親しい仲間、ともに協力して充実した一日を楽しみました。



■ ■ ■ 短信 一時帰国団が来道 日本サハリン協会

日本サハリン協会の一時帰国事業が、9月5日から16日の日程で行われました。今回は、サハリンとシベリアから31名が一時帰国しました。函館、札幌、稚内をめぐる行程で、親族や永住帰国者との交流を深めました。





旭川でボランティア研修会

帰国者もやれることがあればうれしい



バイチャゼ スヴェトラナ先生
北大メディア・コミュニケーション研究院

これまで旭川で続けてきたボランティアさんとのおしゃべり交流会は、ボランティアさんによるさまざまな活動と結びついて広がってきました。今回は、ボランティア研修会『帰国者との共生を通して私たちは、私たちの社会は何を得られるのでしょうか』をテーマに、11月24日、旭川国際交流センターで開催しました。

講師は、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の樺太帰国者問題の研究者であり、自らCaSA NPOで外国に繋がる子ども達の支援にあたる実践者であるバイチャゼ スヴェトラナ先生です。

帰国者問題とボランティア活動を語る

はじめに旭川市役所福祉保険部水上主査から「センターと市社協の協力でおしゃべり交流会が始まった」と今ではボランティアさんが「私も行くから一緒にいこう」と帰国者を誘ってボランティア活動に参加、「感動しました」とあいさつしました。

大切なのは思いやり、他者尊重

ボランティアとは・・・旭川市社協箭原課長

ボランティアさんは、旭川市社会福祉協議会のボランティアセンターの呼びかけに応えた人たち。

研修会ではボランティア活動の専門家である同市社協地域福祉課箭原課長にボランティアさんへ一言と講話をお願いしました。箭原課長は、ボランティア活動は、「社会奉仕の気持ち、人のために役に立ちたい」と強制ではなくちょっとやって見ようかと「相手を思いやる何が役に立ちたいなという気持ち 心の交流がベース」が大切と語りました。「何より大切なのは相手と対等な立場、他者尊重」ボランティアはすごく難しい印象があるかもしれないが素朴に人と人のつながりを大切にするとということだと話しました。

新しいところで新しい生活は始める人

日本人という枠に入れるのは無理

スヴェトラナ先生は、樺太帰国者の歴史を語り、サハリンはあもしろい土地、他の植民地と違う多くの民族が移動を繰り返したと、戦後の日本人の引揚から

今日の帰国までを話しました。現在の帰国者は帰還移民として新しい所で新しい生活を始める人と、日本人という枠に入れるのは無理であり、そのことを認めれば私たちも楽になると語りました。そして帰国者家族は、日韓の三つの国に生活し、離散家族が生まれていると新たな問題も指摘しました。帰国者の世代ごとの特徴や就職、進学の問題など広く帰国者事情を説明し、大いに理解を深めました。

ボランティアさん 熱い語らいの場

帰国者とともに新しい自分を創る

研究者でありサポーターであるというスヴェトラナ先生は、子ども達の学習支援にあたるCaSA NPOの活動を紹介、ボランティアは自分の目的が必要、ないと長続きしないと、また帰国者はいろいろなスキルを持っている。帰国者もやれることがあればうれしいと語りました。参加したボランティアさんとの熱い語らいの場になりました。ボランティアさんからは「冬まつりボランティアに参加しつよに楽しみすごく良かった。」「交流を通じて共感することがたくさんある」「いっしょに行動し共有、共感し連帯して連携を深める」「おしゃべり交流はすごくおもしろい。これからは続けたい」「帰国者は新しく生きている。私も新しい自分になろうと自分を創っている。共感できる」と語り合いました。歴史を知り、帰国者問題の背景を知り、ボランティアという地域社会に奉仕する活動の意義を語り合い、実り多い研修会になりました。

一泊・交流の旅 洞爺・有珠ジオパーク 学んで、そして仲間の交流深める

今年(ことし)は北海道を学ぼうと洞爺湖有珠山ジオパークへ一泊研修旅行が行われました。一泊研修旅行は、お互いに苦難の人生を歩んだ帰国者同士がゆっくり交流を温め、気持ちやすくと大好評です。全道各地から集まった50名の中国帰国者、樺太帰国者のみなさんが参加しました。

夜は食事をともしての交流会、わきあいあい話も弾みました。そして、「私たちはいま火山活動の真上にいる」と火山が創り出した洞爺湖、有珠山ジオパークについて学びました。歌で楽しみ、温泉で楽しみ、夜遅くまで話らいが続きました。

二日目は、素晴らしい秋日和。遊覧船で洞爺湖の中島に渡り、大地の活動でできた湖や火山を体感しました。みなさんは「湖、美しいけれど火山はこわい」と感想。そこで暮らす生活も見て北海道への理解も深め知識を広げた旅行になりました。そして、旅に出て仲間たちとともに人生を振り返る時間を持って心晴れやか。「来年は函館へ行きたい」と、さらに遠くへと意欲ある声も出ました。



稚内・日本の家庭料理を学ぶ会 郷土の味楽しんで、おいしい体験

「魚の煮付けが上手にできない」「日本料理の作り方が

わからない「おほえたい」という声を聞いて、日本の家庭料理を学ぶ会を開きました。今回は、稚内の樺太帰国者のみなさんに食と健康を学び、さらに日本の家庭の味を知ってもらおうと、10月25日、荒岡真貴子先生(前栄養士会宗谷支部長)を講師におかえて講習会を開きました。稚内のみなさんには初めての体験。みなさん、楽しみに参加しました。はじめに荒岡先生から「食と健康」の講義、高血圧

と塩分や栄養のバランスなどを学びました。荒岡先生が「稚内らしい料理がいいでしょう」と郷土の食材を使ったメニュー「ホタテ干し貝柱の炊き込みご飯」「さんまの蒲焼き」「きのこ汁」「たこの酢の物」です。そして荒岡先生の明るく活発な指導に、みなさんも活発に楽しんで料理作りに取り組みました。調理法のちがいが知ったり、そしてみんなで昼食交流会、おいしい、おいしいと感想を語り合いながら郷土の味を楽しみました。楽しい会だったと、そこでまたまた「魚の煮付けが上手にできなくて」という声が、次のメニュー決まりです。

学び・工場見学会と北海道博物館 衛生管理や自動化におどろき

10月6日、二世帰国者の、働く現場工場見学会を行いました。見学したのは海苔を加工製造する株式会社ホツカン白石工場です。見学の前に、海苔と工場についての説明がありました。同社はさまざま

まな海苔を加工生産し、コンビニのおにぎり用の海苔も生産しています。そして見学、食品工場の厳しい衛生管理や品質管理、清潔な工場、自動化された海苔加工ラインにみなさん驚き、日本の職場への理解を深めました。続いて、改装がなった北海道博物館での見学学習会。博物館の展示をみて、太古から現在に至る北海道の歴史と人々の生活、文化を学びました。

ボランティアさんと食文化交流会

たのしい！もっと開いて！

9月4日と11日、おいしいという感動をとともにするボランティアさん



と料理作り、そして会話交流、自然におしゃべりも出てくと食文化交流会は好評です。今回は、中国料理が中心。ボランティアさんといっしょに体を動かし手を動かし心もはずみ、そうすると口も動いて話もはずみにぎやかに進行します。包子(肉まん)や餃子、餅に干豆腐の涼菜、みなさんできあがった料理を味わいながら会話交流を深めました。

参加した帰国者のみなさんの声です。

「食文化交流会が開かれました。4班に分かれて各班でそれぞれ料理を作りました。どの班もみなお互いの経験を交流しました。どの班の料理もすべておいしく、みなさん大いに食べてとても楽しく過ごしました。中国と日本の豊かな料理の、お互いの学び合いを促進するこの活動が常に開かれるよう願っています。」(Rさん)

「おもしろかった、おいしかった。つぎは中国料理と日本料理をいっしょにつくりたい。」(Lさん、Wさん)「1ヶ月に1回とか、もっと多く開いてほしい。また参加したい」(kさん、Aさん)

料理講習会 お正月料理に挑戦

12月14日、家庭料理講習会は、お正月を前にした和食のメニューに挑戦しました。参加した帰国者のみなさんも食の異文化体験に興味しんしん。メニューは、筑前煮、ぶりの幽庵焼き、ゆり根の卵おし、紅白なますです。試食では、はじめて食べる食材も、わいわいがやがや、おいしい、いやこれはちょっと？などと味を楽しんでいました。

相談事業 道内各地へ巡回相談



センターの相談事業は年間でおよそ1500件、帰国者のみなさんの安心を支える大切な仕事です。札幌圏では相談あればすぐに対応します。いま、担当する相談員が特に思うのは広い北海道に散在する、帰国者のみなさんです。道内の15市町村には1家族だけの帰国者が住んでいて、支援も、情報も届きにくいところがあります。

そこでセンターでは相談員が道南、道東、道北へ巡回訪問して話を聞き、相談支援を進めてきました。地域で元気に暮らしている人、孤立して不安を抱えている人、ここ数年の訪問で、今ではひとりひとりの顔が見えてセンターと繋がってきています。

生活相談や医療通訳をすすめて、制度を知らずに支援給付手続きしていなかった4件の支援、地域で孤立する人の支援などなど取り組んできました。相談にあたっては道庁とも連携し、訪問先の市役所、役場、また支援相談員の理解や協力もあり地域の連携もできてきています。そのことが大きな安心を届けることにつながっています。

課題は、地域での支援者を見つけること。地域で中国語やロシア語を話せる人がいないところが多いのです。身近な地域に顔の見える支援者がいることが帰国者にとって大きな支え、安心です。

相談員はこのことも考えながら、帰国者のみなさんの笑顔を見るために訪問します。

●●編集後記 地域には人を育む風土があり、生活がありその積み重ねの歴史があります。帰国定着したみなさんが、郷土を知ることはとても大事なことです。それも知識としてだけではなく、空気を感じる、匂いを感じるというような体験、人の生活を感じるといった体験を通して身体に染みこんでいくような理解の仕方、といったら大げさかもしれませんが。新たな土地で新たな人生を築く帰国者のみなさんの自分づくりの基盤となる？と感じるのですが (K)